

## 日本語学習者の「カモシレナイ」の使用実態に関する一考察

## —婉曲用法を中心に—

サイ エンホウ  
崔 艶 鵬 (神戸大学大学院生)

## 1. はじめに

「カモシレナイ」は、例1のように、蓋然性の低いことを表す「推量」表現とされているが、実際のコミュニケーションにおいては、「推量」表現のほかに、例2のように、「婉曲」表現としても使用されることがある。例2の「カモシレナイ」は、「無理」と直接的に言うことも充分可能であるが、間接的に表現することで、断言を避け、聞き手に対して丁寧さを示す。

(1) あしたは雨が降るかもしれない。

(2) 太郎：「今日、カラオケに行かない？」

花子：「明日、バイトがあるから、ちょっと無理かもしれない」

婉曲表現として使われている「カモシレナイ」には、「对人的配慮に基づき主張の抑制・断定回避」(蓮沼 2017) などといった特徴があり、コミュニケーションを円滑にさせる効果がある。例えば、衝突が生じやすい「議論」では、相手と異なる意見を述べようとする場合、「そういう考え方もあるかもしれませんが、…」という表現を用いて、相手の発言の一部を認めつつ本音を言うと、摩擦が避けられる。また、自ら発言する場合でも、発言内容など聞き手から否定的に評価されそうな不安があるのであれば、例3のように「カモシレナイ」を使って前置きをすると、自己防衛の機能が働く。

(3) 「ちょっと変かもしれませんが、私は新しい靴のにおいが好きです」

このような実際の言語使用の場に目を向け、「カモシレナイ」の婉曲用法が適切に使えるようになれば、日本人とのコミュニケーションにおいて不必要な摩擦を避けることができると思われる。しかし、日本語学習者の産物物においては、「カモシレナイ」の推量用法が中心となっており、婉曲用法はあまり使用されていないように思われる。

そこで本研究では、日本語学習者(以下は学習者とする)による「カモシレナイ」の婉曲用法の使用実態について明らかにすることを目的とする。具体的には、実際のコミュニケーションにおいて、学習者が「カモシレナイ」をどのように使用しているのかを明らかにする。

## 2. 先行研究

ここでは、学習者による「カモシレナイ」の使用実態に関する先行研究を述べる。これまで、学習者による「カモシレナイ」の使用実態について述べたものは少なく、高木(2017)の一編のみである。高木(2017)は、KYコーパスをデータベースとして、日本語母語話者(以下は母語話者とする)による「ソウカモシレナイ」の対話における機能について考察を行ったものである。また、日本語教科書において「カモシレナイ」の扱い方と、学習者による「カモシレナイ」の使用状況についても調査を行っている。その結果、学習者による「カモシレナイ」自体の使用が少なく、「カモシレナイ」は使いこなせるまで時間のかかるものであるかもしれないと結論づけた。しかし、高木(2017)では、学習者による「カモシレナイ」の使用実態が数の統計にとどまっており、使用上の特徴についてまでは触れられていない。本研究では、量的な側面だけでなく、学習者が「カモシレナイ」をどのように使用しているのかといった質的な側面にも注目し、考察を行う。

### 3. 「カモシレナイ」の意味・用法及び本研究の立場

本節では、考察の観点にも関わる「カモシレナイ」の意味・用法に関する先行研究について述べる。そして、それらを踏まえ、意味・用法の捉え方に関する本研究の立場をまとめることにする。

「カモシレナイ」の意味・用法は、基本的な意味・用法である「推量」と、語用論的な意味・用法である「婉曲」に分けられる。まず、「カモシレナイ」の推量用法については、先行研究の定義を踏まえて次のように定義し分類する。話し手の発話時における推量、あるいは命題が真である可能性に対しての判断を表す。話し手が事柄を断定できない、確信が持てない、また事柄が成り立つ可能性の度合いが低い、情報が不十分でわからないという場合に用いる（平田 2001）。次に示すように、まだ発生していないことに対する推測であることもあれば（例 4）、すでに発生した事実に反する推測であることもある（例 5）。さらに、例 6 のように複数の命題内容が成立する可能性を表すものもある。（用例出典の詳細については末尾の「用例出典一覧」を参照されたい。）

(4) 知寿母「結婚しようと言われただけで、する気はない」

知寿 「なんだ。どうして？すればいいじゃん」

知寿母「ま、いろいろと。仕事も忙しいね、いつかするかもしれないけど、今はしない。どう、びっくりした？」 『ひとり日和』 p.139

(5) A と B は親友で大喧嘩して縁を切った後、A は事情の経緯を C に言う時

A 「もし私がそのようなことを言っていなかったら、今の私たちの関係(B との関係)

はもっとよかったかもしれない」

(作例)

(6) 博士「しかもその場所は頂上とは限らない。切り立った崖の岩間かもしれないし、谷底かもしれない」 『博士の愛した数式』 p.55

また、「カモシレナイ」の婉曲用法は、基本的な意味・用法である「推量」から派生してきたものであるという見方がされている（仁田 1991）。近年では、婉曲表現として用いられている「カモシレナイ」について、その意味・用法の下位分類に関する研究が盛んに行われている（平田（2001）、麻生（2002）、蓮沼（2017）など）。表 1 に先行研究による婉曲用法の下位分類を示す。

表 1. 先行研究による婉曲用法の分類

	平田 (2001)	麻生 (2002)	國澤 (2013)	蓮沼 (2017)
婉曲用法の 下位分類	「間接的表現」 「疑似的同意」 「前置き」	「事実や自分自身に判断 ・意見等の表明回避」、 「弁解」、「譲歩・妥 協」、「自己の客観化」 「皮肉」、「受け流し」	「間接的表現」 「疑似的同意」 「前置き」 「拡張した婉曲 用法」	「文末用法」 「前置き用法」

本研究では、学習者が婉曲用法を使えているのかを確認することが主要目的であり、婉曲用法の下位分類がどうであるべきかを論じるものではない。後述するが、学習者の婉曲用法の使用は限られているため、麻生（2002）のような詳細に分類し分析を行うことが有効であるかどうかの検証は難しいと思われる。そのため、ここでは、ひとまず、次に示す平田（2001）の下位分類「間接的表現」「疑似的同意」「前置き」を採用し、次に示す下位分類の元で考察を行うこととする。

#### ① 「間接的表現」

直接的に言うことも充分可能であるが、間接的に表現することで、聞き手に対し丁寧さを示す配慮をしている場合である（平田 2001）。

(7) 太郎：「今日、カラオケに行かない？」

花子：「明日、バイトがあるから、ちょっと無理かもしれない」 (作例、例2を再掲)

## ②「疑似的同意」

相手の発言の一部を認めていると言うより、認めているように見せかけ、自己主張をする前に、その主張を和らげるためのクッション作用を持っている(平田2001)。「間接的表現」との違いは、「疑似的同意」の場合、形式的に、相手の発言の一部を直接に、あるいは概括に繰り返していることにある。

「そうかもしれない」のように、指示語によって示されることもある。

(8) 正夫「お前、そんなみみっちいことってねえで……」

杏子「みみっちいかもしれないけど、それが私の人生だし。それがわたしの幸せなんだ……」 (平田2001:62(例8))

## ③「前置き」

「前置き」は、後述するが、「カモシレナイ」の婉曲用法のうち、学習者、母語話者のいずれにおいても他の意味・用法に比べてより多く使っている意味・用法である。そのため、考察の便宜上、詳しい考察を行っている蓮沼(2017)を参考にし、以下の3つにさらに分類し、考察を行う。

A. 「話し手の認識に対する前置き」：話し手の認識の適切性、的確性についての聞き手の評価を話し手が推測する場合の用法で、自分の認識が適切・的確でないという否定てきな意味をもつものが多い。

(9) また、気が早いかもしれませんが、新型スイフトにスポーツモデル(JWRCスイフトレプリカ)をラインナップに加えて欲しいです！もちろん、スイスポに関しては現行がかなり気に入ってます！

(蓮沼2017:13(例13)<sup>1)</sup>)

B. 「聞き手の認識に対する前置き」：聞き手の感情・感覚・知識・評価など、聞き手の内面の認識状態に対する話し手の推測を注釈的に述べ、聞き手の私的領域への配慮を表すものである。

(10) PC初心者です。ばかな質問だとお笑いかもしれませんが、お願いします。

(蓮沼2017:13(例17))

C. 「話し手の発言に対する前置き」：話し手の発言の情報価値や、発言態度、発言内容、表現方法などの適切性に対する聞き手の評価を予測的に述べ、聞き手への配慮を示す用法である。

(11) 「好きな男子との付き合いを母親から禁止されている小6女子の相談」

受験はあなたの人生に関わる事だから、恋愛にかまけていてはダメですよ。おせっかいかもしれませんが、キス以上は絶対しないだね。

(蓮沼2017:14(例20))

## 4. 研究方法

本研究では、「学習者が使っている『カモシレナイ』は、ほとんどが推量用法であり、婉曲用法ではほぼ使われていない」という仮説のもとで、母語話者の使用実態と比較しつつ、学習者の使用実態について考察を行う。以下、調査資料と調査対象について述べる

まず、調査資料について述べる。婉曲用法は、聞き手がいて成立するものであるため、話し言葉を対象にする必要がある。そのような点を考慮し、本研究では、会話コーパスをデータベースとして調査を行い、同じ状況のもとで母語話者によるデータも収集・収録している『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS)を利用し、データを収集した。I-JASには多様なタスクが収集・収録しているが、相手が存在している「対話」、「ロールプレイ」というタスクのみを調査対象とした。「対話」は、話者ごと

<sup>1</sup>蓮沼(2017)は「Yahoo!知恵袋」からデータを収集している。「Yahoo!知恵袋」では、対面の相手は存在しないが、相手を想定して質問-回答という形式でやりとりをしており、話し言葉的な特徴も持っていると考えられる。

に様々な話で構成されている一方、「ロールプレイ」は状況が予め設定されているため、同じような内容で話が構成されているという特徴がある。また、検索方法としては、オンライン検索アプリケーション「中納言」を使用し、文字列検索を用いて「かも」をキーワードとして検索した。

次に、調査対象について述べる。本研究では、海外教室環境の学習者および国内教室環境の学習者（950名）<sup>2</sup>と母語話者（50名）を調査対象にした。学習者の日本語能力の判断基準について、I-JASには「J-CAT」、「SPOT」という2つの言語テストが使用されている。本研究では、学習者のレベルがより細分化されている「J-CAT」<sup>3</sup>を判断基準とした。

上で述べた基準のもとで、考察対象となった「カモシレナイ」を意味・用法別に示すと次の表1のようになる。なお、意味・用法の判定が難しかったものは「その他」<sup>4</sup>として分類した。また、学習者の使用例のうち、接続の仕方などにおいて形態的な誤りが見られていても、意味・用法の判定が可能であったものについては、考察の対象にした。

表1. 「カモシレナイ」の意味・用法別の出現数

	学習者		母語話者	
	出現回数	割合	出現回数	割合
推量用法	964	91.5%	159	78.3%
婉曲用法	77	7.3%	41	20.2%
その他	13	1.2%	3	1.5%
総計	1054	100%	203	100%

表1において、婉曲用法だけに注目すると、学習者の使用率は、母語話者の使用率の約3分の1程度であることがわかる。学習者の場合、「カモシレナイ」の婉曲用法での使用は、学習者単独で見ても、1

<sup>2</sup>海外教室環境の日本語学習者、国内教室環境の日本語学習者を分けて分析したところ、「カモシレナイ」の使用傾向について大きな差が見られなかったため、本研究では教室環境で日本語学習を行ったものとして、海外教室環境の日本語学習者と国内教室環境の日本語学習者を同じものとして扱い、考察を行った。

<sup>3</sup>J-CATのレベル判定の目安は今井（2015）を参照した。

<sup>4</sup>発話が不連続であり、意味・用法の判定が難しかった例や、推量用法、婉曲用法の間で判断がゆれた例、については「その他」として分類した。推量用法、婉曲用法の間で判断がゆれた例は次のようなものである。

<C> 「(都市と田舎) どちらに住んでいたいですか？」

<K> 「あ、私はやっぱり、都会、住みたいです、はい」

<C> 「理由をゆってください」

<K> 「なんか、都会で、いろいろなことが、うん、できるので、例えば、んー、なんか暇な時、カラオケ、行けるしーあとは、なんか友達と一緒に居酒屋とか、はい、飲んで、行けるしそのうんはい、だから都会の方が好きかもしれない。私はい」 (GAT23) (対話)

上記の例のような、感情・感覚形容詞につく「カモシレナイ」の発話は「カモシレナイ」の婉曲用法として認めることもできそうである（國澤2013、蓮沼2017）。しかし、「都市が好き」などのような内容を「直接述べるのがはばかれる内容」（『日本語文法事典』による婉曲の定義）とすると不自然であり、また、婉曲的に言う必要性もない。一方で、自らの感情・感覚でもよく分からない場合があることを認めるとすれば、感情・感覚形容詞につく「カモシレナイ」は推量用法として成立することになる。このような例をどう扱えばよいか、現段階ではまだ十分に考察ができておらず、「その他」として分類した。

割未満であり、その数は、母語話者に比べても少ない。「学習者が使っている『カモシレナイ』は、ほとんどが推量用法であり、婉曲用法ではほぼ使われていない」という仮説通りの結果となった。

以下、母語話者の使用実態と比較しながら、学習者の婉曲用法の使用実態について述べていく。

## 5. 学習者による「カモシレナイ」の婉曲用法の使用実態

### 5.1 意味・用法別<sup>5</sup>

学習者の婉曲用法の使用は数が少なく、その下位にある意味・用法においても使用が限られるが、使われている用例を意味・用法別に分けると表2のようになる。表2は、「カモシレナイ」の婉曲用法の下位にある意味・用法別に出現回数、割合を示したものである。表2に示すように、「カモシレナイ」の婉曲用法の出現頻度は、学習者と母語話者のいずれにおいても、「前置き」>「擬似的同意」>「間接的表現」の順になった。しかし、母語話者の使用は「前置き」用法に大きく偏っており、学習者の場合、相対的に、「間接的表現」「擬似的表現」が占める割合が多くなっている。

表2. 婉曲用法の使用実態

	学習者		母語話者	
	出現回数	割合	出現回数	割合
間接的表現	22	28.6%	9	22.0%
擬似的同意	26	33.8%	10	24.4%
前置き	29	37.7%	22	53.7%
総計	77	100%	41	100%

「カモシレナイ」の婉曲用法のうち、学習者、母語話者のいずれにおいてもより多く使われているのは「前置き」であるが、次のような違いが見られる。学習者が用いている「前置き」では、例12<sup>6</sup>のような「話し手の認識に対する前置き」である「自分の認識が適切・的確でないという否定的な意味を持つ」前置き（全13例）と、例13のような「話し手の発言に対する前置き」という「自己防衛の意図を含んだ」前置きの用例（全16例）は見られたが、例14のような「聞き手の認識に対する前置き」に関する用例は見られなかった。

(12) <C> 「そのCSさんが日本語を勉強しようと思ったきっかけって何なんですか？」（…中略）

<K> 「そして、あの、あの、きっかけはちょっと変かもしれないですが、ある日は、あーんとー、あの一、私は一、友達のために翻訳したいと、思います」（CCS50）（対話）

(13) <C> 「えっとそれはどんなお話だったか覚えていますか」

<K> 「えっと猫お願い、『猫のお願い』はちょっとー、あーし、話は一ちょっと、長くてー、説明することは、難しいかもしれませんが、えっとー、普通の女の子は、あー猫を助けて、あー、あ、たっあ、あ、だ手伝います。（…後略）」（ENZ48）（対話）

(14) <C> 「食べ物はどうですか？」

<K> 「食べ物もですね。すいません、これも期待に反するかもしれませんが、あんまりおいしくはないんですよ」（JJJ49）（対話）

<sup>5</sup> 復文形式の例について、「前置き」「間接的表現」の間で判断がゆれる例が、学習者と母語話者のうち、各3例あり、全て「間接的表現」にした。ただ、判定を変えても、「前置き」>「擬似的同意」>「間接的表現」という出現頻度の結果に影響を及ぼさない。

<sup>6</sup> 例中の、<C>は協力者による発言を意味し、<K>は調査対象者による発言を意味する。末尾の括弧に示しているのは、調査対象者の整理番号（JJJ以外は学習者の整理番号である）および調査項目である。

「聞き手の認識に対する前置き」は「聞き手の内面の認識状態に対する話し手の推測を注釈的に述べるもの」（蓮沼2017）であり、聞き手の私的領域への配慮を示す。姫野（2004）は、日本語では敬語使用よりも「敬語の枠に収まらないさまざまな配慮を重んじる」としている。円滑なコミュニケーションを保つために、「聞き手の私的領域」に関わる発話が回避できないのであれば、聞き手の私的領域へ配慮する話し方が求められる。「カモシレナイ」の「聞き手の認識に対する前置き」用法は、断定を回避することによって「聞き手の私的領域」に踏み込んだ補償を行っていることから、この「聞き手の認識に対する前置き」用法はコミュニケーション教育の重要なポイントを示しているように思われる。

また、「疑似的同意」においても、違いと思われる特徴が見られる。学習者による「疑似的同意」の使用は、自発的に使用しているかどうかの判断が難しいものがあった。例えば、例15では、対話の協力者（<C>）が、意見をいう時に「便利になってるかもしれませんよ？」と一回「カモシレナイ」を用いて、学習者はそれを受けて回答する際に「カモシレナイ」を使っている。このような例が、全体の23.1%（26例のうち、6例）を占めていた。すなわち、無意識的に協力者の言葉を反復して「カモシレナイ」を用いている可能性がある。母語話者の場合、そのような例は見られず、すべて（全10例）自発的に用いられているものであった。

- (15) <C> 「でも、十年二十年後は田舎のほうもこう発展して、便利になってるかもしれませんよ？」  
 <K> 「はい、そうかもしれませんけど、うーん、いつまでも、都会とは違うと思いますね」

(CCH34) (対話)

## 5.2 日本語能力別

表3は各婉曲用法について日本語能力別に学習者の使用実態を示したものである。学習者の日本語能力別に使用傾向を見てみると、「前置き」、「疑似的同意」、「間接的表現」のいずれにおいても、初級から中級までの学習者による使用はわずかしかなく、中級後半から増加する傾向にあった。なかでも、「前置き」の場合、全体の7割以上が、上級以上の学習者による使用であった。また、一人の学習者が複数回を使用していることもあったことから、実際の使用人数は、使用回数よりも少なくなる。複数回を使用している学習者は、10人のうち、7人は上級以上の学習者である。

表3. 日本語能力別から見る使用傾向

レベル	総人数	間接的表現		疑似的同意		前置き	
		出現回数	使用人数	出現回数	使用人数	出現回数	使用人数
初級	33	0	0	0	0	0	0
中級前半	134	1/4.5%	1	2/7.7%	2	0	0
中級	306	3/13.6%	3	2/7.7%	2	2/6.9%	2
中級後半	283	7/31.8%	7	11/42.3%	11	6/20.7%	5
上級前半	152	6/31.8%	5	7/26.9%	6	14/48.3%	13
上級	39	5/18.1%	5	3/11.5%	3	6/20.7%	5
母語話者相当	3	0	0	1/3.8%	1	1/3.4%	1
合計	950	22/100%	21	26/100%	25	29/100%	27

## 5.3 タスク別

タスクを「ロールプレイ」（表4ではRPとする）、「対話」に分けて母語話者の使用実態と比較しながら、学習者の使用実態を見ると、「疑似的同意」、「間接的表現」のいずれにおいても、母語話者の場合、話の内容についてより自由に話せるタスクである「対話」で使用している傾向があったのに対して、学習者の場合、テーマが予め設定されている「ロールプレイ」の項目に集中している傾向にあった。「前置き」については、両方とも「対話」での使用が多かった。

表4. タクク別の使用実態

	学習者			母語話者		
	間接的表現	擬似的同意	前置き	間接的表現	擬似的同意	前置き
RP	19 (86.4%)	15 (57.7%)	2 (6.9%)	3 (33.3%)	2 (20.0%)	1 (4.5%)
対話	3 (13.6%)	11 (42.3%)	27 (93.1%)	6 (66.6%)	8 (80.0%)	21 (95.5%)
合計	22 (100%)	26 (100%)	29 (100%)	9 (100%)	10 (100%)	22 (100%)

また、「依頼」と「断り」の二つのタスクがある「ロールプレイ」に注目すると、「依頼」よりも、「断り」において、学習者と母語話者の使用実態には大きな違いが見られた。「断り」における学習者の使用例は27例であるが、その内訳は、間接的表現11例、擬似的同意14例、前置き2例であった。一方、母語話者による使用例は3例しかなく、その内訳は、間接的表現2例、擬似的同意1例であった。このことから、「断り」において、母語話者は「カモシレナイ」をそれほど用いていないことがわかった。

「断り」における学習者の「間接的表現」の用例を見ると、例16のように、「無理」など、否定的な意味を有する語とともに用いられているものであった。日本語の会話教科書<sup>7</sup>の中には、日本人が相手の好意を断る際には、「はっきり断る言い方をあまりしない人が多いようだ」と指摘し、「難しいかもしれない」といった表現は断り表現だと指導しているものも見られる。しかしながら、「断り」における母語話者による使用実態を観察してみると、実際には例17のように、「カモシレナイ」ではなく、「～と思う」など、多様な表現を用いて断っている。ここから、学習者の場合、他の表現を使ってもいいところで、ある一定の特徴を持つ語とともに「カモシレナイ」を比較的多用している傾向があることがわかる。

(16) <C>「今ねー、料理を作る人がねー、一人、辞めたのでー、来月からー、接客の方じゃなくて料理を作る仕事を、担当してくれませんか？」

<K>「えー、私はあの一、全然あの一料理が一苦手ですから一、えーちょっと一ねえすちょっと無理かもしれません。」 (FFR10) (ロールプレイ・断り)

(17) <C>「急にね調理の人が辞めてしまって、今すごく困ってるんですよー、人手が足りなくなってしまって一なので J」さんちょっと調理の方(ほう)に入っていたきたいんですけどどうですか？」

<K>「あの一お野菜を洗ったり切ったりであれば、まあだいじょぶですが、ただあの一、調理、全般はすごく苦手なので、えー長くその仕事をするとゆうのはあの一自分には難しいと思います」

(JJ05) (ロールプレイ・断り)

#### 5.4 まとめ

以下、これまで述べてきた、学習者による「カモシレナイ」の婉曲用法の使用に見られる特徴をまとめる。

①学習者による「カモシレナイ」の使用は推量用法での使用が圧倒的に多い。婉曲用法の使用は少ないながらも、使用頻度を下位の意味・用法ごとに示すと、「前置き」>「擬似的同意」>「間接的表現」の順となる。これは、母語話者による使用頻度の傾向と同じである。

②学習者による「前置き」について、「話し手の認識に対する前置き」「話し手の発言に対する前置き」は使われている一方、「聞き手の認識に対する前置き」は使われていないことがわかった。また、「擬似的同意」では、相手が発した「カモシレナイ」の提示を反復しているような「カモシレナイ」の例も少なからず見られた。

<sup>7</sup> 『会話に挑戦!中級前期からの日本語ロールプレイ』(2005)、スリーエーネットワーク、p.37.

③「前置き」、「疑似的同意」、「間接的表現」のいずれにおいても、学習者の場合、中級後半～上級前半から使用が増加する傾向にある。なかでも、「前置き」の場合は、全体の7割以上が、上級以上の学習者による使用であった。また、複数の婉曲用法を産出した学習者が見られたが、その中の7割は上級以上の学習者であった。

④「ロールプレイ」、「対話」に分けて分析すると、「間接的表現」は「ロールプレイ」、なかでも「断り」の場面において使用される傾向にあった。「断り」の表現として、「無理」、「難しい」などといった、否定的な意味を有する語と多く用いられていた。

以上のことから、学習者による婉曲用法での「カモシレナイ」の使用は、使用されていたとしても、意味・用法、日本語能力、使用場面のいずれにおいても限定的であることがわかる。

## 5. おわりに

本研究では、母語話者の使用実態と比較しつつ、学習者による「カモシレナイ」の婉曲用法の使用実態について考察を行った。そして、学習者による婉曲用法での「カモシレナイ」の使用は限定的であることを指摘した。しかし、次のような課題が残っている。

まず、5.1節で述べた学習者が「カモシレナイ」の「聞き手の認識に対する前置き」を使っていないということから、学習者がこの用法を使えていないという結論を出すためには、「聞き手の私的領域」について学習者がどのように理解しているのかについてさらなる考察が必要であると思われる。

また、「カモシレナイ」の婉曲用法があまり使われていない要因として、同じようなことを他の表現で表している可能性があるかもしれない。例えば、相手と違う意見を述べる場面で使える「そうかもしれないが…」について、復文の産出に慣れていない初、中級の学習者は「そうかもしれないが…」の代わりに「そうですね。でも…」を使っている可能性がある。また、断り場面に使える「難しいかもしれない」などという「間接的表現」では、学習者だけでなく、母語話者による例もかなり少なかった。今後は、「議論」「断り」など、「カモシレナイ」の婉曲用法が使えるような場面において、「カモシレナイ」ではなく、他のどのような表現が使われうるのかについても合わせて考察を行っていきたい。

## 主要参考文献

- 今井新悟 (2015) 「J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test)」李在鎬 (編) 『日本語教育のための言語テストガイドブック』くろしお出版、pp.67-85.
- 高橋祐輔 (2017) 「『ソウカモシレナイ』の婉曲的用法—対話における機能に注目して—」『一橋日本語教育研究』5号、pp.31-40.
- 國澤里美 (2013) 「語用論の観点から見た認識のモダリティ形式『カモシレナイ』について」大葉大学応用日語学系学術検討会発表、pp.1-17.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 日本語文法学会編 (2014) 『日本語文法事典』大修館書店.
- 蓮沼昭子 (2017) 「『カモシレナイ』と『ヨウダ・ミタイダ』の婉曲用法—認識的モダリティの典型的相違がもたらす振る舞いの対照性—」『日本語日本文学』27号、pp.1-26.
- 姫野伴子 (2004) 「配慮表現から見た日本語」『月刊日本語』3月刊、pp.76-79.
- 平田真美 (2001) 「『カモシレナイ』の意味—モダリティと語用論の接点を探る—」『日本語教育』108号、日本語教育学会、pp.60-68.

## 調査資料及び用例出典

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(<https://ninjal-sakoda.sakura.ne.jp/laj/>) (最終閲覧日: 2021年9月1日) 青山七恵 (2010) 『ひとり日和』河出書房新社 小川洋子 (2005) 『博士の愛した数式』新潮社